

大正期婦人雑誌における「戦略」としての「文学」 - 『婦人くらぶ』創刊号(1920)を中心に(2016) Literature, as a stratagem in Women's magazines in 1920s - Focused on "Fujin club"-(2016)

◎李承京¹
LEE Seung Kyung

¹ 東京大学大学院学際情報学府 The University of Tokyo

要旨…本研究は、近代婦人雑誌の『婦人くらぶ』の創刊号(1920年)をとりあげ、同誌が大正文学言説における「本流」と「傍流」に分かれた「文学の分節」の構造を十分に活用しながら、芸術を目指す文学側からは「権威」を、消費を目指す大衆文学側からは「快樂」を持ち込み、効果的にその意味世界を構築していたことを明らかにした。分析の結果、同誌の有島武郎のテキストは消費される「権威」として、菊池寛のテキストは消費される「物語」として掲載されたことがわかった。
キーワード 大正文学、婦人雑誌、連載小説、有島武郎、菊池寛

1. はじめに—先行研究の検討と研究の目的

本研究は、大正期の大衆婦人雑誌の成長と拡大において当時の人気項目の連載小説や人気小説家の評論が当時の文学言説との繋がりの中でどのようにその意味世界を構築していたかについて、その詳細を明らかにするため行われた。近代日本の婦人雑誌は1884年の日本最初の婦人雑誌の『女学雑誌』創刊からわずか40年余りの短時間で西欧に匹敵する規模まで成長した。このような大正期の爆発的な大衆婦人雑誌の成長の背景には、第一次世界大戦後の好景気による経済的な余裕と女子中等教育の拡大による女性読者の出現が存在していたことは、様々な先行研究で指摘されたとおりである。

大正期からの婦人雑誌マーケットの成長とともに、雑誌編集においても連載小説や著名作家の文章が重視されることになって、従来の文学界をめぐる環境も大きく変わる。この変化について早めに論じたのが大宅壮一である。大宅は「文壇ギルドの解体期」で、従来の「文壇」に対し「ギルド」という名称を持って呼ぶが、それは、素人を徹底的に排斥する閉鎖的なプロ団体としての文壇の有様を封建的手工業者の間で見られる現象の「ギルド」概念を以て説明するためであった。(大宅 1926) このような確固たるプロ団体としての文壇は、大正期から昭和初期にかけて大きな変動を経験することになるが、大宅はその原因の一つとして婦人の読書欲増大とそれに伴う婦人雑誌の発展を挙げる。婦人雑誌という新しいマーケットの登場によって文学者の社会的地位は急激に上昇し、有名作家の書いた文章は高い市場価値を持つことになり、もはやある文学作品の価値を判断する基準は、ジャーナリズムマーケットによる「市場価値」と文壇による「芸術価値」の二つに分かれることになる。しかし、大宅をはじめ、青野季吉や片上伸の議論は、ジャーナリズムマーケットとしての婦人雑誌がもたらした文学界への影響力を論ずるものであって、婦人雑誌に掲載されたテキスト自体に対しては一貫して否定的に評価している。「女性の文学的要求」で青野季吉は、婦人雑誌を中心に人気を集めた小説群に対し「小ブルジョア女性文学」で、「要求満足の安易性」のレベルに止まっていると断言する。(青野 1925)

このような低評価の中で、婦人雑誌の通俗小説を同時代の社会・文化的なコンテキストの中で分析したのが前田愛である。前田は、大正中頃から現れる新中間層の拡大と女性中等教育の拡散の状況を実証した上、文壇と出版ジャーナリズムとの相互浸透作用が加速度される大正の後半期において通俗小説がどのように変化していくかを菊池寛の作品分析を通じて明らかにした。彼の分析によると、菊池寛の出世作の一つの『真珠婦人』が持つ革新性、つまり、清純な美少女と欲望に溢れた悪女の両面を持つ女性主人公の「瑠璃子」という人物は、新聞小説だからこそ可能な人物像で、掲載メディアが新聞から婦人雑誌へ変わると、「家庭小説の女主人公の生き方は、家庭内の婦人読者にたいしていささかの慰藉とひきかえに、「家」の秩序を再認識させる鏡の役割を果たしていた」ため保守的な性格を持つことになり、それが婦人雑誌の小説群が持つ限界として現れると

指摘する。(前田 1968) 前田の分析は、文壇の崩壊と出版ジャーナリズムの出現の中で作品発表の場が多様化される中、ある作家の作品スタイルが掲載メディアによって変化することを把握した分析で、婦人雑誌の通俗小説に対し通常指摘された典型性、通俗性という限界が、青野や大宅が指摘する「二流読者」としての女性読者のレベルの問題だけではなく、意図的に計算された作家の思惑でもあったことを証明した点で、本研究にも大きな示唆を提供した。しかし、前田の菊池寛論は、あくまでも大正期の「新しい女」のムードとの関わりの中で行われた作品論で、掲載メディアとしての雑誌自体に対してはそれほど触れていない。「通俗作家としての菊池寛の役割は、いわばこの『主婦之友』のレヴェルから『婦人公論』レヴェルまでを含む通俗小説の新領域を開発することになった」と認識しながらも、ある作家の作品テキストが、それを掲載し流通させた雑誌の意味世界において、どのように置かれていたかについては説明していない。

本研究は今までの先行研究での成果と限界を踏まえ、大正期大衆婦人雑誌の連載小説や文学関係のテキストが同時代の文学言説と結びつきながら、どのように雑誌側によって選択・編集され、婦人読者の目の前で構成されたかについて、1920年10月の『婦人くらぶ』の創刊号を対象とし、分析を行う。

2. 大正期の大衆婦人雑誌における「文学」の位置と意味

(1) 近代日本婦人雑誌の形成と変化の歴史 — 「啓蒙」から「娯楽」へ

近代日本婦人雑誌の性格は明治期から大正期にわたって大きく変化する。1884年に日本最初の婦人雑誌として『女学新誌』を創刊した近藤賢三と巖本善治は『女学新誌』の発展版として1885年に『女学雑誌』を創刊する。巖本は雑誌作りにおいて特に思想の問題にこだわっていた。彼は「女学」について「女学は即ち、「婦女子に関する一科の学問」と云えること也。之を言ひ換ゆれば、其の心身に付いて其過去に付いて、其将来に付いて、其の権利、地位に付いて、及び其の現今に必要な雑多の物事に付いて、凡そ女性に關係する凡百の道理を研究する所の学問」であると正義するが、このように明治期の婦人雑誌は、女性を研究する学問で思想としての「女学」に基いて作られたのである。明治女学校の校長として勤めていた巖本の履歴からも推測できるように、明治期の婦人雑誌群は、主に明治期の男性知識層が女性を対象として行う「知」のテキスト生産と発表のメディアとして機能したことがわかる。このように「女学」系列の婦人雑誌群は、知と想像の構築物としての「女性」を表彰するメディアとして存在する一方、女性読者に対する啓蒙のイデオロギを発信するメディアとしても機能する。「新しい女」を主張する日本女子大学出身のエリート女性中心の『青鞥』、『中央公論』の創刊号から発展して創刊された『婦人公論』等の論説中心の高いレベルの婦人雑誌群は、この「女学」系列の婦人雑誌に属する。これらの雑誌群は、明治期における近代的「知」の形成の歴史に応じて「女性」を対象化する一方、直接的に女性読者の覚醒を呼びかけるテキストを通じて、比較的に分りやすい形で当時のジェンダーイデオロギを構成する。

明治期の婦人雑誌群の性格は1920年代に入って大きく変わる。北田暁大は近代日本における広告の成立とその変化の歴史を考察しながら、「教化の対象であった「民衆」が刺激に反応するだけの「受け手」へとすり替えてしまう1920年代以降のディスプレイ・ネットワークによって、〔中略〕啓蒙の終焉と操作の時代の始動」が予知されていたメディアとして、1917年創刊の『主婦之友』をとりあげる。(北田 2008) 従来の「女学」系の婦人雑誌群とは違って『主婦之友』を原点とする大正期の大衆婦人雑誌群は、「受け手」としての女性読者に焦点を当て、多様な戦略—小学校卒でも分る記事、最新の印刷技術を使った多彩な挿絵、口絵、写真の掲載—を通じてより流動的な誌面を構成していくのである。この段階になって、明治期の比較的に分りやすい形で提示された女性啓蒙の言説は、より多くの読者を牽引するための多彩なテキスト構成の戦略の間に溶解され、「啓蒙」と「商品」の境界は曖昧になっていく。

しかし、『主婦之友』に匹敵するほどの売り上げを見せた『婦人くらぶ』を創刊した野間清治が、その主旨において「完全なる『日本の母』を作ろう」(野間 1939)とする意図に基いて『婦人くらぶ』を創刊したと明確にしていることからわかるように、大正期の婦人雑誌の作り手は「二流読者」としての女性を啓蒙するという使命をいつも抱えていた。このような商業主義と女性啓蒙の両方を達成させるための戦略的な連帯が現れるところが、「小説」項目である。ここで言う「小説」とは、明治維新以降の「近代小説」を意味するが、明治期の婦人雑誌に「小説」項目として掲載されたテキストを見ると、前近代的「物語」の段階に止まっているものも多い。ようやく大正期に入ってから、大宅の言葉を借りると、「膨大な新植民地」として大衆婦人雑誌がジャーナリズムマーケットとして現れ、大手作家たちも婦人雑誌に作品を発表することになる。一部の文学エリートを中心とした閉鎖的プロ団体としての文壇には吸収されない、「芸術性」よりは「大衆性」を重視した作家群は、も

はや、婦人雑誌というメディアを通じて作品を続々発表することになる。それ故、前田も大衆文芸史において重要な時点だと指摘した昭和元年の1926年に、白井喬二を提唱者とする二十一日会で『大衆文芸』が創刊されたり、『中央公論』が大衆文芸研究の特集を企画したりしたのは、大正期の婦人雑誌や大衆雑誌での大衆作家群の活動とその意味をまとめる性格も持っていたのである。

次には、物語が持つ娯楽性と教訓性の両面を十分に活用し、「戦前の四大婦人雑誌」にまで成長した『婦人くらぶ』を中心に、大正期の婦人雑誌において「文学」がどのように配置され、それが当時の文学言説とどのように関わっていたかについて、明らかにしたいと思う。

(2) 「モノ」の『主婦之友』と「物語」の『婦人くらぶ』

近代大衆婦人雑誌の先行研究で目立つのは『主婦之友』への集中現象である。『主婦之友』社の設立者の石川武美による「クラス雑誌」の戦略、つまり、女性全般ではなく「主婦」という特定の階層に焦点をあてた先駆的企画力、流動的な誌面構成、多様な文化事業を通じた読者共同体作り等は、近代大衆婦人雑誌を代表するテキストとしての『主婦之友』の確固たる位置を語る。それ故、明治期の「女学」系列の雑誌群とは明確に区別される本格的な商業雑誌の始まりとして『主婦之友』は近代婦人雑誌研究史に君臨してきた。このような大衆婦人雑誌の先駆けとしての『主婦之友』の様々な戦略は、外の雑誌も模倣することになり、1929年に発行された『出版警察報』10号の「婦人雑誌最近の傾向」を見ると、当時の婦人雑誌に対し「婦女界、主婦之友、婦人倶楽部、婦人世界、婦人公論等々殆んど同じ体裁と同じ厚さをもって、表示の色刷の美人書が媚びる様な眼差して読者の購買力を唆つて居る。」と述べている。(内務省警保局 1929) つまり、1920年代の婦人雑誌群は、雑誌別の特徴を語りにくいほどお互い類似した体制と戦略に従って作られ、そのロールモデルが『主婦之友』であった。

しかし、「小説」項目に焦点を当て『主婦之友』の1917年3月の創刊号からの誌面構成を見ると、初期の『主婦之友』は、小説や物語項目に対してはそれほど力を入れていなかったことがわかる。1917年3月の『主婦之友』創刊号で「小説」項目として配置されたのは、徳富蘆花の『不如帰』をより簡単にアレンジし、挿絵を加えた「浪子物語」の一つだけである。石川武美の一人企業から始まった『主婦之友』社の設立背景を考えると、このような初期の小説の不備は現実的な人力不足による自然な状況として考えられる。また、石川武美の確固たる実用記事中心の企画戦略に従って、実際の生活とは対比されるファンタジーとしての小説には注目していなかった可能性も高い。1917年の創刊の翌年の1918年になってようやく岡本綺堂の小説『七面鳥』(1918年1月-12月)が連載されるまで、『主婦之友』には『不如帰』を脚色した「浪子物語」やトルストイの『復活』を脚色した『カチュシャ物語』のように、有名な原作を女性主人公を中心にアレンジし挿絵を加えた「物語」項目が掲載されただけである。1918年からの岡本綺堂の連載以降にも、一冊当たり多くは五編から十編までの小説や物語が掲載された他の大衆婦人雑誌と比べて『主婦之友』での小説項目の比率はそれほど高くない。

『主婦之友』と対比されるのは『主婦之友』より3年後の1920年10月に大日本雄辯會(後の講談社)から創刊された『婦人くらぶ』である。元々『婦人くらぶ』は『婦人公論』を読むレベルの知識層の婦人読者を狙っていたが、大衆婦人雑誌の激しい競争構図の中で後発隊としての不利を乗り越えるため積極的な大衆化戦略を取り入れる。そして「毎号特大付録つき!小説に記事に婦人雑誌中第一の大人気!」の宣伝文句を挙げ積極的に女性読者を獲得していく。このように野心満々に婦人雑誌競争に参入した『婦人くらぶ』の1920年10月1日の創刊号を見ると、華麗なる筆者の名が目立つ。著名文学者としては有島武郎、芥川龍之介のエッセイ、評論家の三宅雪嶺や法学者の穂積重遠の固い論説、または、女性医者吉岡彌生の妊娠に関する情報記事も並んでいる。また、小説に関しては、菊池寛の短編小説「姉の覚書」を初め、四編の連載小説が掲載されている。創刊号以来『婦人くらぶ』の小説項目は次第に話題になり、1920年代からの菊池寛、吉屋信子、加藤武雄のような代表的な大衆小説家の作品の多くは『婦人くらぶ』で見ることができる。また、1929年の鶴見祐輔の『母』、1934年の久米正雄の『月よりの使者』、1935年の吉屋信子の『女の友情』、1938年の川口松太郎の『愛染かつら』は、『婦人くらぶ』で連載されていた同時期に松竹や新興キネマによって映画化されるほど、『婦人くらぶ』の成長において小説項目は肝心の役割を果たす。

『婦人くらぶ』の編集方針の中で目立つ小説項目の重視戦略は、創立者の野間清治が『私の半生』において『婦人くらぶ』の創刊趣意について「単なる家政本位のものでなくできるだけ教育的なもの、精神的なものという狙いであった」(野間 1939)と語ったことから推測できるように、最大のライバルの『主婦之友』における実用記事中心戦略を意識しながらも「モノ」だけではなく女性読者の欲望の解消手段としての「物語」を精神的な商品として提供しようとした『婦人くらぶ』特有の方針の結果とも言える。しかし『婦人くらぶ』における小説項目の役割は商業主義の論理に還元されるだけではない。明治の「女

学」系列の雑誌群から引き継がれる女性啓蒙の使命と大衆小説が持つ娯楽性が絡み合う時、より強力なイデオロギの手段として機能することもできる。1942年から1943年まで『婦人倶楽部』に連載された山本周五郎の「日本婦道記」が江戸時代の武家女性の母と妻としての献身を描くことで総力線ムードを後押ししたとの疑いから今でも自由ではないことからわかるように、国家イデオロギに賛同する大衆小説は効果的な国策メディアとして機能することもできる。

ここまでの検討を踏まえると、『婦人倶楽部』は、先行研究での実用・低級の『主婦之友』と知識・高級の『婦人公論』の対比では把握できない大正期の大衆婦人雑誌における小説項目の役割と意味が見えてくる資料として考えられる。また、昭和初期の国民大衆雑誌の『キング』の「母体」としての『婦人倶楽部』の位置を考えると、大衆総合娯楽雑誌としての『キング』が取り入れた多様な戦略の先行の場としての『婦人倶楽部』の役割も見逃せないのである。

3. 『婦人くらぶ』創刊号(1920)からみる「文学の分節」

(1) 「二流読者」の女性と「家庭小説」

大衆婦人雑誌の『婦人くらぶ』が誌面構成において、それほど小説や物語欄にこだわっていたことは、当時「大衆」として把握されるほどの多数の女性の読書が前提されていたからである。しかし、「女性の読書」は、明治からの一部のエリート文学青年たちの同人誌を中心とする文壇文学とは別のところ、すなわち、一般読者を対象とする新聞連載小説の形で受容されていた「家庭小説」というジャンルの出現と結び付けられて、「低級」な読書として認識された。『婦女界』の名編集者の都河龍が「婦人雑誌の編集」において、「婦人雑誌の文芸欄が、世の文学批評家に、全然没却されてみことである」（都河 1931）と不満を語ったように、婦人雑誌に連載された小説に対する同時代の文学界からの評価は一貫して低い。このような家庭小説に対する軽視は、テキスト自体が持つ典型性や通俗性という限界から起因したところもあるが、鬼頭七美が「『文学』の芸術的価値を定位させたことが、家庭小説の文学史における機能である」（鬼頭 2013）と指摘したように、「芸術」としての文学が自己同一性を確保するため、その対立項としての家庭小説を耐えず「排除」する動きの中で「家庭小説」の主な消費層として想定された女性たちの読書も自然に「低級」視されたことから起因する。このような「文学の分節化」、つまり、文学の「本流」と「傍流」が分かれて、その出版、文壇の評価、読者の性格が目に見えない複数の線によって、暫定的でありながらも確定的に分かれる現象は、婦人雑誌の編集ではより露骨敵に現れる。

1920年10月の『婦人くらぶ』の創刊号を華やかに飾る有島武郎であるが、彼の「小説」が『婦人くらぶ』を始め他の婦人雑誌に掲載されたことはない。これは、芥川龍之介の場合も同じで、著名人士のインタビューのような軽いエッセイの「僕の好きな女」が『婦人くらぶ』の創刊号に掲載されるが、同時期に書いた「作品」群は、主に『中央公論』、『新潮』、『改造』等の雑誌で発表されている。このような「分節」は、作家自身による掲載メディア選択の問題と雑誌側の原稿料やテキスト分別の問題がお互いに合わなかったという利害の不一致からだと思われる。問題は、このような「分節」が自然な環境として雑誌テキストの選択と構成に影響を与えていたことであり、この環境の中で女性読者は「本流」の文学言説の磁場に囲まれながらも、同時に「傍流」の文学テキストにも接していくのである。つまり、婦人雑誌の「文学」をめぐる意味世界は、文壇を中心に活動する著名文学者の抽象的で理論的なテキスト（評論）と大衆作家の娯楽性を優先する物語テキスト（小説）との分節によって支えられていたのである。

次には、婦人雑誌のテキストを、小説や物語だけではなくそれと並存する評論やエッセイまでも同じ地平で考察して、「権威」としての純文学と「快楽」としての大衆文学が絡み合っ女性読者たちに発信した「意思」が類似していること、そして、このような同一の「意志」によって「本流」と「傍流」で分かれているように見える大正期の文学言説が、婦人雑誌の意味世界においては、お互いを支えていることを明らかにしたい。

(2) 消費される「権威」—有島武郎の「三つの希望」

1920年10月の『婦人倶楽部』の筆者の中では、文学者として頂上の人気を集めた有島武郎や芥川龍之介の名が目立つ。1920年の当時、良心的な知識人で文学者としての有島の人気は、特に女性読者の間で高かったが、『或る女』の発行元の業文閣の足助素一が有島の個人雑誌の『泉』の発行部数が一万五千部に達していたと証言したり（足助 1923）、「有島武郎の本は一万は必ず売れる」（藤森 1938）と言ったことを考えると、有島は一万単位の愛読者を保有していたと考えられる。それ故、より多くの婦人読者を獲得するため必死だった『婦人倶楽部』にとっては、これ以上相応しい筆者はいなかったと考えられる。また、『或る女』の増刷の状況を確認すると、前編は1919年3月23日に初版が、同年10月4日に二十六版が出ていて、後編は1919

年6月16日に初版が、同年の10月15日には二十二版が出ていることがわかる。つまり、1920年10月の『婦人倶楽部』に「三つの希望」を発表した有島は、問題作『或る女』を発表し世間の話題になった人気作家という文学情報を背負って読者たちの前に現れるのである。

評論の「三つの希望」は、内容的には、婦人雑誌に典型的な軽い女性啓蒙のエッセイで、「男性が五の自由を有するなら、女性にも並五の自由を得させねばならぬ」と言いながらも「然しながら同時に、自由のあるところにはそれに相当する責任があらねばならぬ。」と言い、女性の解放や自由による責任を強調する。(有島 1920) しかし、「三つの希望」で興味深いのは、冒頭で有島自身が「私はよく女性の人から私の創作中に出て来る女性について非難を受ける。その人達の言う所に従えば、私の描出する女性は概していうと、いつでも私の描出する男性よりも低い水準にいるか、ひねくれた性格を持っている。女性は私によってある侮蔑を受けている、とのことだ」と言い、自分のテキストへの同時代の女性読者たちの反応を認識していることを自ら語る場所である。すなわち、有島本人が「三つの希望」を読んでいる読者たちが既に自分の他のテキストも読んでいたと前提した上で、語り始めるのである。それ故、この常套的とも読める評論は、作家を中心に展開される外部のテキストとの連帯によってより説得力を得ていく。つまり、評論で言及されている「私の描出する女性」、「低い水準にいるか、ひねくれた性格を持っている」、「私によってある侮蔑を受けている」と描写される女性は、自然に『或る女』の女性主人公と繋がられ、よりリアルなイメージを持って読者の前で現れるのである。作家自身が読者との間にある文学知識やイメージの共有を前提とした時、読者たちは、この共有に従って『或る女』の「葉子」で現れる生々しい人物像を切り口とし、評論を読んでいくのである。

1920年10月の『婦人くらぶ』創刊号に掲載された有島の評論は、テキスト自体の内容だけではなく雑誌外部のテキストとの連帯を通じてお互いのリアリティを支えている。常套的に抽象的な理論は、小説で生々しく描写される女性象によって具体性を持つことになり、また、小説結末での女性主人公の破滅はその理論を違反した懲罰として読み取れることもできる。それ故、「女学」系列の婦人雑誌群から「大衆・実用・娯楽」の婦人雑誌群へ転換しながらも、雑誌の作り手における女性啓蒙の意志は、著名人としての文学者の「権威」とそれを支える様々なテキストと手を組んで、ジェンダーイデオロギーを構成していくのである。このように、大正期の大衆婦人雑誌は、読者たちが自ら総合的に多様なテキスト間の関係を読解し、全体的な意味世界を構築していく読みが可能な空間として現れる一方、その読みを方向付けようとする作り手の意志も作用するメディアとして機能する。

(3) 消費される「物語」—菊池寛の「姉の覚書」

1920年10月の『婦人くらぶ』の創刊号で公式的に「小説」のタイトルが付けられたテキストは総五編で、菊池寛の「姉の覚書」、岡本綺堂の連載小説「最後の舞台」、近松秋江の長編連載家庭小説「ゆく雲」、半井桃水の長編連載歴史小説「時の仇討」、岡本霊華の絵書小説の「朝の波」がそれである。岡本綺堂、近松秋江、岡本霊華は、すでに同じ出版社の『講談倶楽部』で活躍していた作家群であり、岡本綺堂は『主婦之友』の連載小説も手掛けていた。その中でも菊池寛の存在は格別である。彼は「座談会」という日本雑誌文化特有の装置を本格的に活用し、読者との共感を通じて自ら作家としての「権威」を成立させていく一方、作品に関しては、前田が指摘したように、婦人読者を考慮した保守的な家庭小説や恋愛小説を書いて独自の作品世界を構築した。次には、菊池寛の作品の中で、あまり知られていない短編の「姉の覚書」を分析し、作家が女性人生における「幸福/不幸」の区別とその条件のある姉妹の恋愛物語を通じてどのように描いているかを確認したい。

「姉の覚書」は、京都琵琶湖疎水の周りをよく散歩する語り手の独白から始まる。ある日、疎水の周りを散歩していた語り手はある女性の日記を発見する。日記の語り手は「澄子」という二十歳の女性で、日記は母と妹の「純子」が東京に出かけた日から始まる。東京の純子から送られる手紙で澄子は妹の純子が叔父の息子の「進一郎」という「今年廿四五の筈、去年帝大在学中に外交官の試験に及第なされた秀才」と恋に落ちたことを知る。しかし、進一郎と純子の関係は、進一郎が姉の澄子を意識することで一変する。このような妹から姉への転換の契機が、妹の純子とは違って姉の澄子が「文学」の教養を持っていたことから生まれたのは興味深い。かつての文学少女で小説に夢中の婦人読者たちにとって、理想的な男性主人公が文学の教養を身に付けた澄子に恋をしてしまう展開は、まさにメロドラマ的な快感を与える。「姉の覚書」は、文学愛好家としての婦人読者層の共感を活用し、物語としての娯楽性に充実しながらも、彼女らの文学的教養の価値を家庭内部に収斂させることで、婦人雑誌のテキストとしての身分も忘れないのである。それ故、「姉の覚書」は「商品」と「啓蒙」の境界を曖昧にする婦人雑誌の「小説」テキストとしての典型的な特徴を持っていると思われる。

「姉の覚書」は、読者がある女性の日記を順次的に読むことで、澄子と純子姉妹の人生が「幸福」や「不幸」の間でどこへ

向かうかを最後まで予測させる構造を取っている。この展開は、典型的なメロドラマとしての特徴でもあるが、婦人雑誌特有の女性人生における「幸福と不幸」の言説から起因したところもある。大正期の婦人雑誌のテキスト群を見ると、女性一生を「幸福＝成功」と「不幸＝失敗」の二項対立の図式で分けて語るテキストが多いが、この図式は、雑誌の性格に問わず現れていたことがわかる。それ故、『婦人くらぶ』に掲載された「姉の覚書」は、大正期特有の「幸福と不幸」の言説に充実に、澄子の口から何回も「幸福」を言わせるのである。大正期の婦人雑誌では、名前を堂々に掛ける「幸福」や「成功」の物語と名のない語り手の「悲劇」や「失敗」が対比され、その劇的な対比からの快楽を通じて商業主義の目標を達成しながらも啓蒙の論理にも充実することが可能になる。語り手によって「幸福」と「不幸」の言葉で語られる澄子と純子姉妹の運命は、このような大正期婦人雑誌特有の女性人生に対する二項対立の図式を象徴的に表しているのであり、ある女性の日記を拾うことで姉妹の運命を予測していく「姉の覚書」の語り手の位置は、婦人雑誌に描かれている多様な女性の幸福や不幸の物語に接していく婦人読者たちの位置とも重なっている。

4. まとめ

以上、1920年10月の『婦人倶楽部』創刊号を中心に、大正期を代表する大衆婦人雑誌として『婦人倶楽部』が「本流」と「傍流」に分かれた「文学の分節」の構造を十分に利用しながら、芸術を目指す文学側からは「権威」を、消費を目指す大衆文学側からは「快楽」を持ち込み、効果的にその意味世界を構築していたことを明らかにした。このような大正文学の磁場の中で構成される婦人雑誌のテキストは、文学における「権威」と「快楽」を通じて、女性人生を「幸福」と「不幸」の価値軸で分けることで女性啓蒙の役割にも充実できたのである。それ故、近代日本における「国家＝公的＝男性領域/家庭＝私的＝女性領域」(牟田 1996)の図式形成の中で、『太陽』『中央公論』の総合雑誌が読者を「国民」の枠組みに入れようとした一方、同時代の婦人雑誌群は女性読者を「家庭」の枠組みに向かわせることで、お互いは共謀していたのである。しかし、野心満々に世に出た『婦人倶楽部』の創刊号は、発行部数の四万部のうち六割近くが返品となるが、これは既に当時の女性読者たちが権威的に抽象的な啓蒙のメッセージに飽きていたことを語る。それに、『婦人くらぶ』は、試行錯誤を重ねながらも「物語」の力を活用しながら、菊池寛や吉屋信子のような本格大衆文学者の権威成立の場としての座談会の開催、より刺激的な手記と身の上相談、より豊富な家庭小説の掲載を通じて、「戦前四代婦人雑誌」として肩を並ぶまで成功する。「物語」特有のイデオロギ性と商品性の両面を活用するために、『婦人くらぶ』が取っていく様々な戦略に関しては別稿で論じる。

参考文献

- 青野季吉：(1925) 女性の文学的要求、『転換期の文学』，日本図書センター。
足助素一：(1923) 僕に取りての有島武郎、『明星』，集英社
有島武郎：(1920) 三つの希望、『婦人くらぶ』，大日本雄辯會。
有島武郎：(1920) 自分自身の覚醒—文学者の女性観—，『婦人公論』中央公論新社
巖本善治：(1885) 社説、『女学雑誌』，万春堂。
大宅壮一：(1926) 文学ギルドの解体期、『大宅壮一全集』第一巻，英潮社
菊池寛：(1920) 姉の覚書、『婦人くらぶ』，大日本雄辯會。
北田暁大：(2008) 『広告の誕生』，岩波書店。
鬼頭七美：(2013) 『「家庭小説」と読者たち』，翰林書房。
佐藤卓己：(2002) 『『キング』の時代—国民大衆雑誌の公共性』，岩波書店。
社史編集委員会編：(1959) 『講談社の歩んだ五十年』，講談社
都河龍：(1931) 婦人雑誌の編集、『総合ジャーナリズム講座』第十巻，内外社
内務省警保局編：(1929) 『出版警察報』，龍溪書舎。
野間清治：(1939) 『私の半生』，野間教育研究所。
前田愛：(1968) 『近代読者の成立』，岩波書店。
牟田和恵：(1996) 『戦略としての家族』，新曜社